第 9 回教育哲学会奨励賞　選考結果および授賞理由

選考結果

第 9 回の教育哲学会奨励賞は、『教育哲学研究』第 124 号、第 125 号に掲載された論文を対象として理事会で選考を行い、奨励賞にふさわしい論文として、加藤里奈会員の「私が存在することの「重さ」について ― レヴィナスにおける「恥」概念を手がかりにして ―」（『教育哲学研究』第 124 号所収）と、常深新平会員の「メルロ＝ポンティにおける学習経験 ― ドイツ観念論とのつながりを手がかりに ―」（『教育哲学研究』第 125 号所収）を選定した。

授賞理由

加藤論文は、レヴィナスが「権能（pouvoir = 目的に向けて何かを企てる力）」批判の文脈で使用する「恥（honte）」の概念を手がかりにして、教育者と被教育者との倫理的関係の捉え直しを試みるものである。

加藤論文はまず、これまでの教育哲学研究における他者論が、他者理解の不可能性を認識しながらも、なお倫理的関係を取り結ぶことを「企て」る方向へ議論を展開することで、一種のアポリアに陥っていたことを指摘する。その上で本論文は、存在の事実性、すなわち私が私であることの逃れられなさをめぐるレヴィナスの議論の検討に向かう。事実性を「権能の失敗」と捉えていたハイデガーとは異なり、レヴィナスによれば、その逃れられなさは「恥」ないしは存在の不条理な「重さ（poids）」と捉えられるべきものであり、さらには私の存在は、他者から代替不可能な存在として私が選ばれることで、意味を与えられるものとなる。この議論のなかに加藤論文は、「私は私であるしかない」という不条理な「重さ」が「私は私であらねばならない」という倫理的な「重さ」へと反転する理路を見出す。そして、教育者と被教育者の倫理的関係は、教育者が上のアポリアを乗り越えようとするのではなく、アポリアのなかにとどまりつつ、被教育者から選ばれて存在している自らの存在の「重さ」を背負う時にこそ拓かれる、と結論づける。

加藤論文は、教育における「企て」のアポリアという教育哲学的他者論の課題を正面から取り上げ、自覚や反省を強調する主観性哲学ではなく、存在の不条理性を追究するレヴィナス哲学を援用することでその課題への応答に取り組んでいる。そして、レヴィナスの思想と概念を正確に読み解き、そこに含まれる教育哲学的含意を無理なく再構成し、教育的関係における倫理性を新たな観点から浮かび上がらせることに成功している。

加藤論文については、レヴィナスの読解の精緻さの一方、教育的関係の具体性や、他者を教育するための「権能」の固有性の解明が十分とは言いがたく、また「選ばれた者としての教育者」という捉え方がシステムとしての学校教育や時に複雑な親子関係に当てはまるのか、といった疑問も生じよう。ただ、そうした課題にも増して、教育哲学におけるレヴィナス研究や、

他者性や倫理性をめぐる議論に新しい方向性を示している点は高く評価できるものであり、今後の教育哲学研究のひとつの指針となることが期待できる。

常深論文は、メルロ＝ポンティによるカントおよびドイツ観念論の受容の検討を通して、彼の身体論が、数学のような抽象的な記号操作を要する学習経験をも説明しうる幅広い射程を備えていることを明らかにしたものである。

常深論文によれば、教育哲学におけるメルロ＝ポンティ研究の多くは、メルロ＝ポンティが客観的思考モデルを批判し、そのモデルの起源をドイツ観念論に見ていた、と捉えてきた。これに対して本論文は、『知覚の現象学』ならびに「自然」に関する一連の講義録の検討を踏まえ、次のことを明らかにしている。メルロ＝ポンティが批判したのは、カント自身ではなくフランスにおける新カント派（ラシェーズ＝レイら）による主知主義的なカント解釈である。むしろ彼は、カントが展開しなかった「知的直観」や「直観的悟性」を引き受けつつ〈自然〉概念を拡張したシェリングとヘーゲルを評価した。それによれば、〈自然〉は文化や歴史に内在する意味（方向性）を潜在させたものであり、なおかつ知覚可能なものである。また、メルロ＝ポンティによれば、そのような〈自然〉に促されて特定の身体の構え（＝身体志向性）が成立し、知覚対象に対してさらなる身体の構えを促すものが創造され、伝達される。そしてこれこそが、抽象的な記号操作を要するものも含めた、身体を起点とするあらゆる学習経験の機制である、と結論づけられる。

常深論文は、ドイツ観念論に対するメルロ＝ポンティの解釈が、彼の身体論的知覚経験の哲学の鍵となっていることを説得的に論証しつつ、単なる主知主義批判に終わらない、身体を介した知的なものへの通路を描き出すことで、従来の研究とは異なる解釈を提示しようとした意欲作である。

常深論文に対しては、身体や自然の捉え方がやや限定的すぎるのではないか、あるいは、ドイツ観念論とメルロ＝ポンティの影響関係の検討を踏まえた上での「学習（経験）」概念の再考こそ、深められるべき教育哲学的論点なのではないか、といった疑問も向けられうる。しかしながら、そのような課題を残しつつも、常深論文は、手堅い思想史的論証を通して現象学的身体論の教育学的な射程を拡大することに成功しており、ドイツ・ロマン主義や陶冶論の伝統、現代的な学習論との接続などへの展望を開いている点でも高く評価できる。

以上の理由から、教育哲学会理事会では、上記２篇の論文を、第９回教育哲学会奨励賞にふさわしい論文として選定した。なお、奨励賞規定では論文１篇を授賞対象とすることとしているが、今回は両論文がともに奨励に値する優れた論文と判断されたことから、例外的に２篇の論文に奨励賞を授与することとした。